慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	三十九年秋期史学科見学旅行記(行田・桶川方面)
Sub Title	
Author	細川, 泰子(Hosokawa, Yasuko)
Publisher	三田史学会
Publication year	1965
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.38, No.1 (1965. 6) ,p.150- 151
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19650600-0150

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

内堀、外堀を設けたものであるがいま外部は、ほとんど跡形なくこわされてしまつていた、本丸や二ノ丸は昔の規模を残していて、この部分の石垣は桃山風の堂々たるものであつた、再びバスで次の見学地明王院へ向う。まず五重塔を見学、室町時代の作で本瓦ぶきで総高三十メートル、純和様の端正なる表現をもつている、心柱は第一重天井上で止まり、初重内部は四天柱をたて仏壇を設けてある。注目すべき点は壁面の極彩色の密画であつて、壁には真言八祖行状図、四天柱には金剛界、三十七尊、側柱には尊王または火焔宝珠を描き、その他長押、天井等には唐草文、雲文、亀甲文等で装飾されており中世五重塔として重要なものの一つである、庫裡は工事中で見学出来ず、昼食をとる。再び貸切バスで安国寺へ向う。暦応二年（一三三九）足利尊氏が国ごとに安国寺利生塔を建立した時、この寺を備後安国寺とした、一重の入母屋造り、本瓦葺き、唐様形式の手法をとり入れた室町期の禅寺としてすぐれている。木造阿弥陀如来及び両脇侍立像を見学、鎌倉時代に流行したいわゆる善光寺式如来で一光三尊形の巨大な船形光背を用いている。木造法灯国師座像等をも合わせて見学、徒歩で次の見学地沼名前神社を訪れ、仮設的な初期の能舞台等見学の後、鞆の浦に出て解散した。

（大久保幸作）

三十九年秋期史学科見学旅行記（行田・桶川方面）

十月二十三日、三田の図書館前に集合したが、生憎の雨模様で参加者は少い。清水、河北、江坂の諸先生はじめ二十三名。貸切りバスで行田へ向つたが、都内の道路混雑で意外に時が流れる。まず小見の真観寺古墳を見学。真観寺観音堂の裏手にあり、全長一〇〇米余、高さ五米ほどの小山のような前方後円墳で、後円部に二つの石室をもつ。いずれも緑泥片岩で造られており、一は高さ二米、奥行き五米位で、中ほどに前室後室を画したと思われる緑泥片岩の凸起がみられ、その奥部の壁際には溝が作られていた。一は高さ一米、奥行き三米ほどの小さなもので、かがんでもぐり込むと、暗く冷えびえとして、天井から雨滴がしたたり落ちる。懐中電灯で照らしながらの清水先生の御説明をうかがう。

つづいて、埼玉神社境内の考古館へ、田島宮司の御厚意の麦湯を戴いて体を暖めてから、将軍塚の出土品を中心とした土師器・須恵器、埴輪、金銅製碗、馬具など多く古墳時代後期の代表的なものが陳列されているのを見学する。雨が降りしきるため、丸墓山、二子山古墳を含む関東最大の古墳群の個々については、清水先生の御説明で遠望するにとどめたが、心残りがする。

帰路途中で、桶川町川田谷の泉福寺を訪れる。住職清水、郷土史家青木氏らの御案内で早速阿弥陀三尊像を拝観した。本尊は寄木造

で胎内背面に弘長二年の墨書銘があるという。ほぼ定朝様式を示すが、高い肉髻、中下りの髪際、やゝ角ばった顔、形式化している衣文などは、鎌倉中期に定朝様式を学んだ関東仏師の造像を考えしめるものであり、興味深く見学した。台座・光背・脇侍は別個のものの集合であろうか。雨雲は未だに去らず夕暮をはやめている、急いで北浦和駅へ出て解散。

（細川泰子）

昭和三十九年度卒業論文題目

国史　専攻

小幡真知子　縄文後・晩期における銛の研究
——特に東北地方出土の資料を中心として——

山田　武子　飛鳥・白鳳美術の史的研究序説

纐纈　礼子　定朝様式の成立について

古館　博　陸奥産金考——平泉藤原氏時代を中心として

坂口　啓子　世阿弥の義満同朋衆説について

太田　敏子　一休宗純——狂雲集を中心に

佐藤　友美　紹鷗の茶の湯

桑田　二郎　山城国一揆崩壊の必然性——大和国人の動向を捉えて——

北原　将江　甲斐武田氏の戦国大名としての確立の時期について

鈴木　昭子　島原一揆の原動力

冨田　功　江戸時代における関東の貫高制

横倉　啓子　文久三年八月十八日の政変前後の会津藩の動向

菅　祥三　豊臣氏滅亡の原因に関する一考察

土肥美紀子　家康の譜代家臣政策——領地配分について——

市川　和江　享保改革における勘定所機構を中心とした経済政策

浜田　理弘　島津斉彬の財政政策

中島　正夫　薩藩天保の改革における二・三の問題

新井　幸子　将軍継嗣問題と条約勅許問題——堀田正睦を中心として——

保坂　常隆　井伊直弼の開国論についての一考察

手塚　紀子　伊達宗城の国史周旋に関する研究

林　一身　第一回長州追討と吉川経幹

小嶋　由紀　慶応三年における四藩会議の性格について

田中　武徳　幕末における勝海舟

西谷　光夫　平野国臣の一研究

浅野　澄子　先収会社の研究——地租改正における米穀の商品化に関連して——

東洋史専攻

大田　浩正　アラビア独立運動とハシム家

高山由紀子　韓非子——儒教政治批判について——

川橋　啓一　ロシア留学生派時代について

根岸　俊子　中世インドのイスラム女性の地位